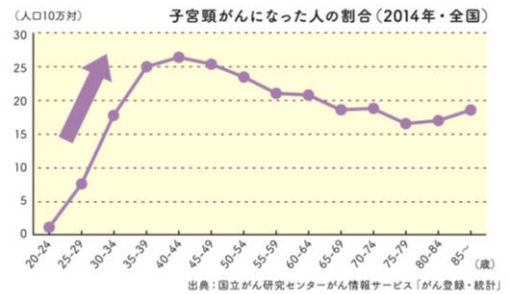
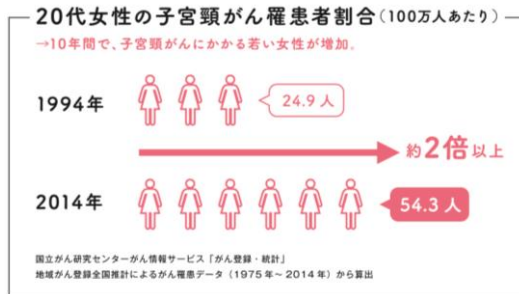


子宮頸がんについて

20歳から2年に1回、子宮頸がん検診受けましょう。

【20代女性で子宮頸がんが診断される人が急増】

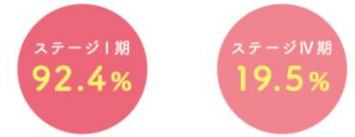
10年前と比較し、子宮頸がんが診断される20代女性が急増しています。子宮頸がんの罹患率は特に20歳代後半から増加し始め、30歳代後半～40歳代でピークを迎えるため、若いうちから検診を受け続けることが重要です。



【初期段階での発見で、5年生存率が90%以上に】

初期の子宮頸がんは、多くは自覚症状がありません。そのため、「子宮頸がんにかかっている」と自分で気が付くことは困難です。しかし、検診で早期に発見できれば、そのほとんどが治癒することが分かっています。

【発見時の進行度に応じた5年生存率】

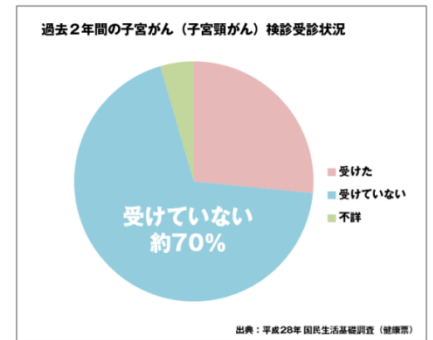


「ステージ」とはがんの進行度を表し、I期(初期)からIV期(末期)に分類されています。

出典：国立がん研究センターがん情報サービス(2016年2月集計)

【20～29歳の女性の7割は早期発見に繋がる検診を受けていない】

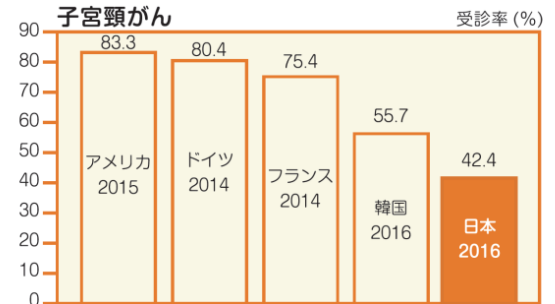
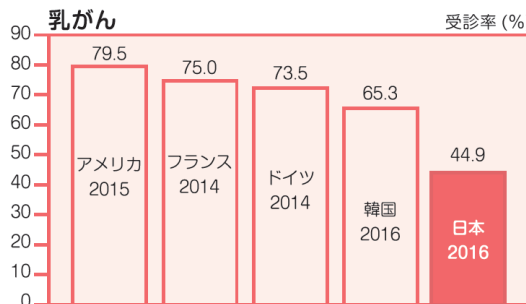
国や都では、子宮頸がん検診を20歳から2年に1回受診するよう呼びかけを行っていますが、20～29歳の女性の7割は定期的に検診を受けていないことが分かっています。



世界の主要国よりも低い、日本の検診受診率

乳がん・子宮頸がん検診とも、日本での検診受診率はドイツやアメリカ、韓国と比較すると大きな差があります。

世界と比較しても、日本では「検診を受けられるのに、受けていない人」が多いことが伺えます。



参考：受診率は乳がん検診の対象年齢は50～69歳、子宮頸がん検診の対象年齢は20～69歳。わが国は「2年に1回」の検診が推奨されているため、2015年と2016年の検診の合計(2年分)に基づく受診率。(厚生労働省「平成28年国民生活基礎調査」)

資料：OECD, OECD Health Statistics 2017 (http://stats.oecd.org/index.aspx?DataSetCode=HEALTH_STAT)